

## 準備委員会企画シンポジウム

### I 子どもへのアプローチ

— 教育心理学はどこまで子どもの立場に立てるか —

異文化コミュニケーションとしての母子関係

子どもの要請する「子どもへのアプローチ」の発見

幼児教育と「発達」研究

教育に対する心理学の貢献

企 画	中 沢 和子	上越教育大学
司 会	内 田 伸子	お茶の水女子大学
話題提供	田 島 信元	東京外国語大学
	齊 藤 こずゑ	國學院大学
	岩 田 純一	京都教育大学
	永 野 重史	国立教育研究所
指定討論者	南 館 忠智	上越教育大学

#### 主 旨

中 沢 和 子

私たちの多くの者は、子どもを対象とした研究をし、子どもについて何事かを明らかにしようとしてきた。けれども、私たちが明らかにしたと考えていることは、実際の子どもの事実のどれだけであり、それは子どもにとってどんな意味を持っているのだろうか。研究者は殆どそれを考えずに、知りたいと自分が思うことを追ってきたのではないだろうか。

現在、社会で子どもたちは逃れようもなく1日の大半を教育実践の場で過ごしているし、これまで教育心理学研究が実践の場とその周辺に大きな影響を及ぼしてきたことは否定できない事実である。私たちが研究を子どもの実体により近づけようとするなら、迂遠ではあっても、教育心理学が子どもにとって何をなしてきたかから検討する必要があると考える。

この主旨のもとに、今回は乳幼児期の子どもの発達と教育について、それぞれの研究分野から、教育心理学研究について問題提起を試み、子どもへのアプローチの方向を求めたいと考える。

#### 異文化コミュニケーションとしての母子関係

田 島 信 元

'70年代以降の新生児・乳児研究のひとつの重要な変化は、'60年代における乳児の感覚・知覚能力の存在の証明を基礎に、彼らの社会的能力や母子の相互交渉過程の研究に移行していったことであろう。そこでの主たる主張は、(1)乳児に社会関係を形成する生来的な能力が存在すること、(2)乳児は社会相互交渉を通して、自己の学習(感覚・知覚)能力を発揮し、広義の知識獲得を果たすことで発達していくこと、(3)それ故、発達の理解にはマイクロな変化過程そのものを重要視する必要があること、などがあげられる。つまり、子どもの能力は文脈との関連において発揮され、成立するのであって、単に能力そのものを測っても能力やその発達のメカニズムの本質は分からないというのである。このように発達の出発点から、子どもは養育者と密接な関わりを持ちながら、自らを育てていくといった積極的な生きざまを見せてくれるが、その発達の方向は、生来的な能力が持つ方向性と、環境条件が持つ特性に制約を受けながらも、逆にそれらの特性を積極的に利用して、自らの進むべき道を模索していくという形で決定される。そして、そこでのキーワードは「自己意識」と「自己制御能力」の獲得であり、同時に、母子関係を「異文化コミュニケーションの成立過程」として捉え直すことである。

#### 子どもの要請する「子どもへのアプローチ」の発見

齊 藤 こ ず ゑ

従来、観察研究法による子どもへのアプローチを行なってきたが、その方法論としての吟味がここ数年来の最大関心事である。すでにかんりのデータ蓄積の後で方法論の吟味とは、時既に遅しなのだが、問題は、今では単に狭い意味での発達研究法の吟味を越え、発達観そのものや、人の認識についての素朴な疑問にまで拡大されてしまった。私に発達研究法への疑問を抱かせるきっかけは、いつも子どもである。本や人の話

はその後で参照されより広い文脈への位置づけに寄与する。子どもとの関係の中から、なぜ?という疑問が湧き、研究テーマになることはよくあるが、子どもはそれだけではなく、発達研究者に、子どもへのアプローチの仕方をも要請するのだ。ただし、この要請は研究者が容易に無視しうるほどに暗黙のものである。

しかし、この暗黙の要請を発見することは、発達研究に必須である。私たちをこの発見から隔てるものは、私たちがそこから決して自由にはなり得ない、あらゆる既成の枠組みである。その相対化による明示化のみが残された道だが、その手段を、子どもに委ねるのは論理循環になりかねない。子どもに頼らずにその要請を発見する手段はなにかを模索したい。

### 幼児教育と「発達」研究

岩田 純一

発達研究も保育実践も、ともに「子どもをよりわかりたい、より知りたい」ことに動機づけられているが、そのアプローチの違いによって、子どもの姿の捉え方には差異がある。しかし、この異なりは、相互の立場からコミュニケーションが対等になされるとき、より子どもの立場に立てる研究や実践への契機となるようにも思われる。

そこで、次のような諸点から、最近の発達研究と幼児教育との対話可能性について考えてみたい。

- (1) いわゆる意味文脈を変数とした研究
- (2) 発達と社会的文脈
- (3) 事例的な研究
- (4) 比較文化的な研究から
- (5) 変数としての研究者の視点
- (6) 対人的な創造性

### 教育に対する心理学の貢献

永野 重史

教育に対する心理学のマイナス面の貢献には次のようなものが考えられる。事態は改善しつつある。

1. 心理学を自然科学らしくしようとして、観察可能なこと(行動)を重視し過ぎた。(指導面での学習者の主観の軽視、行動目標の重視をまねいた。)
2. 学習者の能動性の軽視。(人と動物との同一視。学習者の主観や意図の無視。)
3. レッテル貼り偏好。(知能指数、性格類型、発達段階などの重視。)
4. 因果関係の盲信。(IQと学力、一人っ子と性格、家庭環境と非行などについての蓋然的推論を超えて因果関係を想定。)
5. 文化的ファクターや歴史的ファクターの無視。(これも自然科学を模倣した結果。普遍性と純粋性の尊重は生きている人間の把握を困難にした。)
6. 個人主義。(「学力」や「性格」が集団の中に存在するという可能性の否定。)